

ミャンマーはなぜ西側に接近したか

漢和防務評論 20120821 軍事、政治、外交特集

漢和 JOHN WU 特稿：

長年中国一国と親しかったミャンマーが、2009 年、外交領域で逐次多元化路線を歩み始めるとともに、国内の民主改革の歩みを加速している。中国とミャンマーの関係は、特に経済分野で大幅に冷却化し始めた。典型的な例は、2011 年、ミャンマー政府が密松地区における発電所の共同建設事業に関し中国との協議を棚上げすると述べたことである。ミャンマー大統領は自ら宣言し、この建設計画は民主化の妨げになると述べた。発電所建設計画は全体経費が 36 億ドルであり、建設後 90%の電力が中国に輸出される。建設地は、カチン地区であり、この地域は長年西側に新近感があった。

中国とミャンマーとの関係悪化の痕跡は、2005 年ころから既に顕在化していた。この年、ミャンマー軍事政権は、国境地区にある”解放区”の全面攻撃を決定し、三軍の総司令官 THAN SHWE は、当時次のように指示した：”隣国を基地とする反政府武装勢力を徹底して撃滅せよ”と。これは、名指しはしなかったが、ミャンマー軍事政権による初めての中国非難であった。ミャンマーが中国を遠ざけた真の理由は何か？實際上、経済の中国化は、ミャンマー政府を悩ませた問題の一つに過ぎなかった。ミャンマー政府がさらに憂慮したのは、中国がミャンマーの仮連邦地域のカチン人に長年軍事支援を行ってきたことだ。この軍事支援は、ミャンマー中央政府による同地域の支配を事実上不可能にしている。この憂慮は、2009 年に発生した”カチン特区”の軍事衝突によってさらに明らかになった。カチン人は、實際上ミャンマー系中国人であり、カチン自治区は”ミャンマー華人自治区”と称されている。この衝突によってカチン人の中国への逃亡が頻発するようになった。カチン特區政府は、自ら軍隊を保有しており、この軍事衝突ではミャンマー政府軍もカチン軍も中国製の軽武器を使った。カチン軍が中国製の各種軽武器、車両を使ったことがミャンマー中央政府に高度の関心をもたらした。

中国は、ミャンマー中央政府軍に属さない仮連邦軍を積極的に支援し軍事援助を行っている。これらの軍事支援活動は、20 世紀に中国がミャンマー共産党を支援したことに遡ることができる。カチンの第一特区は、実際上当時のミャンマー共産党軍の”第 101 軍区”であり、当時多くの若い中国人がミャンマー共産党軍に加入した。2009 年、ミャンマー中央政府は、独立したカチン軍部隊を改編しようとしたが、中国の支持を背景にしたカチン自治区は依然多くの武器を手放さなかった。

仮連邦は、ミャンマーの第二特区（元ミャンマー共産党中部軍区）であり、公用語は中国語と仮語である。少数民族の仮族はミャンマーと中国雲南省に跨って住んでいる。仮連邦は、1989 年、ミャンマー中央政府と停戦協定を締結したが、依然独立した武装部隊を有し、”

軍事力をもって経済建設を支援する”と宣言し、編制上いわゆる第 468 旅団を保有している。佤連邦は、今迄のところ表面上は特区であるが、実際は、国家の中の国家を形成している。2012 年 4 月 17 日には、佤連邦軍建軍 23 周年の閲兵式まで行った。佤連邦軍の装備は、中国寶雛（陝西省）生産の装甲車、12.7mm 機関銃、中国軍のヘルメット、中国産東風型トラック、ジープ、73mm 無反動砲、56 式、81 式、03 式突撃自動小銃等々であり、閲兵式、軍事装備品に大量の中国語の標語が出現した。佤連邦では、すでに中国語が佤語に入れ替わり普通語になった。これらの装備をよりどころにして一旦中央政府と開戦となった場合、ミャンマー政府軍は多くの損失を蒙るであろう。

佤連邦軍が使用する中国製重型武器は驚くべきものだ。上述の中国製武器は、如何にしてミャンマー国内の佤連邦に持ちこまれたのであろうか？ミャンマー中央政府の強い関心を引起した。

この問題に関して、記者がミャンマー国防部の高級官員に提出した質問は次の通りである：我々は佤連邦が中国製の重型武器を使用するのを発見した。これはどうゆうことか？国防부는知っているのか？国防部官員は諦めの気持ちで次のように述べた：我々はこの状況を全て知っている。我々は、これらの武器が上述地区に正規のルートで持ちこまれたのではないことを希望する、と。

ミャンマー政府が西側との関係を改善する背景には、高度な対中不信感がある。

以上